# 明石の史跡（１０１）能大夫・野口政之進

明石藩第９代藩主（松平直常）の頃の話である。彼の在任期間は、「明石の歴代城主一覧」によれば、元禄１４年（１７０１）１０月２５日から、寛保３年（１７４３）２月２０日である（『講座明石城史』５８２頁）。ということは、江戸時代の３大飢饉の一つ、享保の大飢饉（享保１７年）を経験しているはずである。

話は、大飢饉の２年前（享保１５年＝１７３０）にさかのぼる。

その夏、旱害（ひでりで水が欠乏して起こる農作物などの災害。ひでりの害＝広辞苑）の徴候があらわれた。藩の対策の切り札は、一つの面（能）であった。

野口政之進は、田中村（神戸市西区玉津町）の八幡宮に派遣され、この面をつけて舞ったところ、７日にして洪水が起こった。つまり効果があったという（田井功氏所蔵『東播秘談』、以下、特に出典を明示しない場合は、同書による）。

問題の面は、昔、越前に山藤四郎という能大夫が所蔵していた。ところが貧困のために、越前屋専右衛門のもとに入質する。ところが霊力のあるこの面を所持したところ、家内震動するなどの奇怪な事件が発生。恐ろしくなった越前屋は、これを本主（山藤四郎）に返還を考えたものの、絶家となっており、時の越前の領主に進上した。あるとき、旱害に悩まされた越前国は、この面により大雨を招き、ひでりを免れた。

『皇都午睡』（こうとごすい）によれば、室町期において、赤鶴吉成（越前大野住）や、暦応４年（１３４１）に歿したといわれる福来政友（越前一乗住）などが、面作者として知られている（『広文庫１９』１１４頁）。

８代藩主直明は、明石入部時に、これを持参したと考えられ、普段は艮（こん＝うしとらの方角）の櫓に収め、大目付の管理下においたという。

天正３年（１５７５）６月、明石地方の炎天を回避するために、岩屋の社殿において、天台宗の僧侶たちが、祈雨に励み、降雨をみた（「太山寺文書」）。あれから１５５年。能大夫が主役の座についたのである。

日本歴史学会会員　　茨木　一成